

**【翻訳と注解】フランチェスコ・ヴェットーリ発ニ  
ツコロ・マキアヴェッリ宛書簡(1513年6月27日  
/1513年8月5日)**

著者	石黒 盛久
著者別表示	Ishiguro Morihisa
雑誌名	金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要
号	13
ページ	39-46
発行年	2021-03-17
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00061941">http://doi.org/10.24517/00061941</a>



# 【翻訳と注解】 フランチェスコ・ヴェットーリ発 ニッコロ・マキアヴェッリ宛書簡 (1513年6月27日/1513年8月5日)

石黒 盛久

Translation and notes: Two letters from Francesco Vettori to Niccolò Machiavelli  
(1513 June 27 and 1513 August 5)

Morihisa ISHIGURO

はじめに

以下に訳出・注解・紹介するのは16世紀初頭のイタリア・フィレンツェで活躍した貴族・外交官・政治家フランチェスコ・ヴェットーリが、その友人ニッコロ・マキアヴェッリ宛に書き送った二通の書簡(1513年6月27日付/8月5日付)である。1513年3月13日から1515年1月16日に至る約二年の間に両者の間に交わされた40通にのぼる書簡は、その作成時期がマキアヴェッリの名著『君主論』執筆時期と重なるところから、古くよりまずはこの書の執筆時期の確定のための文献学的史料として、さらにはこの書の形成の背景としての失脚直後のマキアヴェッリの心理状態を探る史料として、注目されてきた。だが往復書簡というものは、両者の着想と表現の合奏的作業として形成されていくものである。一方の側(この場合ではマキアヴェッリ)における『君主論』脱稿という終着点への収束から、この書簡全体の価値を測定することにより、〈往復〉書簡という合奏としての本作品の潜在的価値の豊かさが、却って見落とされてしまうことになりはすまいか。

事実この40通の書簡につき旧来読書人の関心は、もっぱらマキアヴェッリの筆になる24通、特に彼の牢獄からの出所を伝える1513年3月13日書簡と、『君主論』執筆時期確定の最高の典拠とされる1513年12月10日書簡に集中され、それ以外の書簡が取り扱われることは、

研究論文においてすら極めて稀であった。ヴェットーリの書簡の内容についてはなおさらである。だが繰り返しになるが、往復書簡は二人の筆者の合奏により成立する作品であり、その内容の価値評価もまた各自を二つの焦点とする、複眼的観点からなされるべきである。こうした視座において革新的な業績となったのが、J. M. Najemy, *Between Friends- Discourses of Power and Desire in the Machiavelli-Vettori Letters of 1513-1515*, Princeton, 1993に他ならない。この書において著者ネジェミーは、マキアヴェッリーヴェットーリ間のこの往復書簡を、古代のキケロと当代のペトラルカに源流をもつ人文主義的往復書簡における知の創出の枠組みの中に位置付けるとともに、『君主論』に結実するマキアヴェッリの思想自体を、当時の外交問題の分析を一つの大きな主題とする、この往復書簡の思想形成の触媒作用からの自然的発生物と評価したのであった。

だがネジェミー以降こうした試みが、大きく展開した訳ではない。英米圏のマキアヴェッリ全集を代表するアラン・ギルバートの編になるマキアヴェッリ全集においても、またこれを典拠とした筑摩書房版の邦訳マキアヴェッリ全集においても、この往復書簡に関してはマキアヴェッリの書簡だけが採録され、ヴェットーリの書簡は削除されてしまっている。この往復書簡を往復書簡という位相から取り上げた、学術

的論考も未だほとんどない。このような状況の中ようやく近年に至って、マキアヴェッリとヴェットーリをはじめとするすべての友人たちの往復書簡を収録した書簡集(J. B. Atlinson & D. Sices tr. & ed., *Machiavelli and his Friend- Their Personal Correspondence*, Dekalb, 1996)の英訳が刊行されたことは研究上の大きな一歩である。訳者はネジェミーの驥尾に付し、こうした観点からのマキアヴェッリの書簡研究を企図しており、科研費共同研究「知の技法としての人文主義的書簡と近代教養市民の自己形成」の研究分担者の一人として、論文「ルネサンス期における友人関係と〈自己〉の演出—マキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡(1513-1515)」(『言語文化論叢』23号)の刊行や、ヴェットーリ書簡の翻訳・注解に取り組んできた。

本稿においては冒頭言及したように、こうした継続的研究活動の一環として、1513年6月27日と同じく8月5日に認められた、ヴェットーリのマキアヴェッリ宛を翻訳・注解した。これらの書簡の中心主題は、当時のイタリア政治外交最大の案件であった、スペイン—フランス間の休戦協定締結問題であった。両者のこの問題への関心は既に、今回の二つの書簡に先立つ1513年4月21日のヴェットーリの手紙及びそれに答える4月29日のマキアヴェッリのそれに始まっていた。マキアヴェッリ思想研究上における、4月のこの二つの手紙の重要性とはすなわち、21日書簡におけるヴェットーリの懇意を受ける形で、前年夏の失脚以後無為を託っていたマキアヴェッリが、29日書簡においてメディチ家への就職活動の一環として政治外交分析を再開した点にある。まさにこの両者の間に展開された、スペイン—フランス間の和平協定の成否の検討こそが、メディチ家への就職論文としての『君主論』に昇華された彼の政治的公式の起点となったのである。

今回翻訳した6月27日書簡と8月5日書簡の特色は、上述の4月21日書簡以来のイタリ

アの政治情勢を踏まえつつ、6月6日に生じたノヴァーラの合戦でのスイス軍に対するフランス軍の惨敗を契機とした政治的均衡の激変に応じ、特に教皇の採用すべき政策の提言に焦点を当て、スペイン、フランス、スイス、ミラノ、ヴェネツィア、神聖ローマ帝国さらにははるかイングランドに至る各国の外交上の駆け引きに関する、当時のイタリア外交官の複眼的分析の典型を披露している点に求められよう。加えて興味深いのは、オスマン・トルコの脅威が、ヨーロッパ諸国の権謀術数の全体を覆す存在として、終末論的とも言える陰影をイタリアという将棋盤の上に投げかけている点であろう。それは意外にも、トルコの制覇によるイタリアの教会の支配からの解放という、当時に間違いなく存在した極端な発想を照らし出す証言であり、ルネサンス期政治論における政治と宗教の相関を再吟味するための有力な素材を提供するものとなっている。なお翻訳にあたっては N. Machiavelli (a cura di G. Inglese), *Lettere a Francesco Vettori e a Francesco Guicciardini*, Rizzoli, Milano, 1989 を底本とし、N. Machiavelli (a cura di F. Gaeta), *Lettere*, Feltrinelli, Milano, 1981 (2 ed.), N. Machiavelli (a cura di C. Vivanti), *Opere II*, Einaudi Torino, 1999 をも参看した。各書簡の冒頭に付された番号は、イングレーゼ版書簡集における通し番号である。

なお本研究は科学研究費補助金・基盤(C)「知の技法としての人文主義的書簡と近代教養市民の自己形成」(課題番号 18K00107, 代表・森弘一)の助成を受けたものである。ここに付記し謝意を表すものである。

---

#### 【翻訳と注解】

##### 第11書簡

フランチェスコ・ヴェットーリからニコロ・マキアヴェッリへ

ローマ 1513年6月27日

盛名赫々たる士 ニッコロ・マキアヴェッリ殿

いとも親愛なる友よ。僕は一月半ほど前に受け取った君からの手紙に<sup>1</sup>、いまだ返事を書いてはいなかった。なぜなら近日中にローマをたつことができると思っていたからだし、つまりはそちらに帰って君からの手紙に書かれたことやその他の事柄につき、君と直接話すことができると考えていたからだ。だが僕はいまだここに足止めを食らったままだ。教皇様のご即位になった当初に僕が君に書き送ったことに<sup>2</sup>、僕が惑わされることがなかったことは君に伝えておきたい。僕は、僕たちが僕たちのある友人<sup>3</sup>について語り合った時に君が何度も、彼に対して信を置くべきではない、僕のできる限りどっしり構えていると忠告してくれたことを思い出している。とはいえ君も知っての通り、そしてまたそのことを君自身も実感した通り、生来の性というものはそれを変えるのは難しいものだ。だから僕は誰に対してもつらく当たることができない。相手が望む通りに従ってしまう。

教皇様がお望みになる限り僕はローマにいたることになるだろう。だが聖下がお望みになるなら、僕は喜んでフィレンツェに帰るだろう。ところがヤコボがすら当地ローマを出立したいと言い出したから<sup>4</sup>、それから一週間の間、僕は教皇様に賜暇願いを申し出しかねている。ヤコボは当地にいたくないと言う（それなのに彼はこの地を出立しよ

うとはしない)。だから僕にとっても暇乞いをする方が、途中で断ち切られてしまっている訳さ。そのお陰で僕は、未だにここにいる羽目に陥ってしまった。ブランカッチョと僕はここですることができるのを<sup>5</sup>、なす処もなくただ待っているだけだ。ちょうど僕が昔トリエントの地でそうであったようにね<sup>6</sup>。癩の種は[その時と異なつて]君がここにいないことだよ。なぜならこの閑暇のひと時を、[君がいないことで] あたら空費してしまうことになるからね。フランスが勝とうがスイス人が勝とうが、そんなことは知ったことじゃない。それで足りなければトルコが全アジアの軍勢とともに押し寄せてくるまでさ。こうしてトルコ人は、これまでなされてきた[世の終わりについての] 預言を、一度に実現してくれることだろう<sup>7</sup>。正直言ってそんなことが早くやってきてほしいとすら思っている。今まで見聞きしてきた以上のことが生じたとしても、僕は喜んで拝見するね。

だが君の先に書いてくれた手紙や、あるいは最近の新しい手紙に戻れば<sup>8</sup>、君が正鵠を突いており僕が誤っていたのだと言わざるを得ない。なぜなら僕はスペインがこうも簡単に休戦協定に応じることは決してあるまいと思っていた。つまり僕はその噂の背後には何かがあると思っていたんだ。だがその後の経験が明らかにしてくれたように、それは本当のことではなかつ

<sup>1</sup> 1513年4月29日付マキアヴェッリ発ヴェネトリー宛書簡。

<sup>2</sup> レオ10世(ジョバンニ・デ・メディチ)即位のこと。

<sup>3</sup> ピエロ・アルティンゲッリのことか。

<sup>4</sup> ヤコボ・サルヴィアーティ。彼はヴェネトリーと並ぶ、もう一人のフィレンツェのローマ駐節大使であった。

<sup>5</sup> ジュリアーノ・ブランカッチョ。

<sup>6</sup> ヴェネトリーは1507年にフィレンツェ政府により、大使としてトリエント滞在中の皇帝マクシミリアン1世のもとに派遣されている。この際に参事官

として彼を補佐し、事務方として案件を差配したのがマキアヴェッリであり、両人の親密な交際はこの一見にさかのぼると考えられている。またこの手紙の一文からも、この時にヴェネトリーがマキアヴェッリに対して抱いた、深い信頼と敬意を伺うことができる。

<sup>7</sup> 反キリストの出現とそれに続く千年王国の到来という、黙示録的予言の流行(その典型がサヴォナローラ)を示唆している。

<sup>8</sup> 1513年6月20日付マキアヴェッリ発ヴェネトリー宛書簡。

た。それは君が言った通りだった。だから君からの手紙はその当時ですら僕にはとても好ましいものだったが、こうしたことが分かった今となっては、それは僕にとってますます好ましいものとなった訳だ。そのことをここに改めて君に伝えておこう。さらに言えば君が次の手紙でも、外交情勢につきたいへん見事に論じていることが、僕にはわかった。だから以前と同じく僕は未だスイス人どものことを君と同じように高く評価することはないにせよ、君の意見に全面的に賛同するのだ。こいつらは彼らが参戦した最後の戦いで多大なる戦果を収めたから<sup>9</sup>、どこの国の軍隊がこいつらに対抗できるか、僕には見当もつかない<sup>10</sup>。僕は君が言うことが当を得たことだと全く以て賛成する。即ちスペインとフランスの休戦協定の実現が、いまや以前に比べずつと容易となったということをだ。なぜならフランスがロンバルディアに対して信じがたいまでの渴望を抱いている一方、スペインはスペインでナポリ王国を喪失することを極端に恐れているからだ。そしてこの両者にはスイス人どもがあまりに強大となったようにも思え、またこいつらの尻馬に乗った教皇が勢力を増すのではないかと疑う結果として、お互いの間で争いを続けることは決して好ましくてはなくなった訳だ。そしてもし君が教皇、フランス、スペインそしてヴェネツィア人を併せ見た時、まず

最初に教皇が、フランスに信を置き過ぎスイス人をなおざりにすることに疑念を抱いていることを看とることができよう。というのもスイス人どもは、フランス王など彼らに恩義を負っている存在に過ぎないと見ているから、フランス王に見返され辱められた結果、フランスの側に全面的につかなくなるかもしれないからだ。他方フランス王はと言えばこれまでのフランス人の常道に従って、自身が為した外交上の約束など弊履の如く投げ捨てて、スイス兵を使ってロンバルディアのみならず、全イタリアの征服を考え始めるかもしれない。だがとりあえずここでは、いったん交わされた外交上の約束が守られるべきものと仮定して話を進めていこう。そうした情勢を踏まえた時、ミラノ公をその地位から追う必要などないと、君は判断しないであろうか。彼を防御するのに、新たに軍勢を集める必要はない。スイス人たちが彼を守ってやろうと思えば、彼らは相手が誰であろうと軍勢を南下させ、ミラノ公のことを庇護してやるはずだ。またこうも付け加えて言っておこう。フランスとスペインの間での和約が締結されたとしても、[フランスと]イングランドの和約が容易に成立するかどうか、僕にはわからない。そもそもスペイン王がイングランド王を、そのように思いのままに動かせるとは僕には思われぬ<sup>11</sup>。そればかりではない。皇帝とヴェネツィア人たちとの和約だっ

<sup>9</sup> ノヴァッラの戦いとは、1513年6月6日スイス誓約者同盟軍1万余が、ルイ・ドゥ・ラ・トレムイユ麾下のこれに倍するフランスの大軍を撃破した合戦。この結果スイス軍が支持する前ミラノ公マッシミリアーノ・スフォルツァが、ミラノ公位にいったんは復位した。六月にマキアヴェッリ-ヴェットーリ間に交わされた書簡の多くの部分は、本書簡がそうであるように、このイタリア政治外交の新情勢の検討を主題とするものである。

<sup>10</sup> この疑問に対するマキアヴェッリの回答を我々は、『君主論』第26章の行文において読むことができる。「実際スイスやスペインの歩兵隊は盛況だと

の評判を博している。しかし両軍にはそれぞれに欠点があるから、第三の軍事制度でこの欠点を突けば、それらと拮抗し得るのみか、それに打ち勝つことができるだろう。イスパニア軍は騎兵に対して対抗し得ない。他方スイス軍は戦場で、自軍に匹敵する精強さを有する歩兵と相まみえることとなると、たちまち意気阻喪してしまう。それゆえ古今の経験からして、イスパニア歩兵はフランス騎兵に対抗できず、スイス歩兵はイスパニア歩兵に粉碎されてしまうこととなる」(『君主論』第26章)

<sup>11</sup> こうしたヴェットーリの見解に対してマキアヴェッリは、先立つ1513年6月20日付書簡におい

て、そう簡単に成立しようとは僕は信じてはいない。なぜなら皇帝は山の中に陣取って自信満々の態であり、そこから他者を威圧している。そのためもあって彼は自分が他国と結んだ約定を、ほとんど気にかけることもない。ここでもし君が僕に、「それでは君は教皇様はこの情勢のもと如何に動くべきか」と問うならば、僕は君にこう答えよう。「彼が今やっていることと正反対のことをすればよい」と。というのは、教皇様が浪費をすることをやめないとしても、彼があらゆる手段であらゆる方面から金をかき集めることを、僕が望んでいるという訳ではない。僕はスイス人が実利によって、そしてほかの連中が口約束によって満足するようになることを期待している。なぜなら僕の狙いは、この連中のすべてに対して、できうる限り適切な手段や言葉を使って、対処しようとするところだからだ。もし僕がフランスとスペインの和約に疑念を持つならば、僕はそれが御破算になるよう手を尽くすだろう。つまりそれがイタリアにおいて全般的なものとならない限りは、教皇様はこのような和約にかかわらない方がいいと思っている。そしてこうした諸国間の全般的な和約は、決して困難至極という訳でもない僕と思う。というのもフランスがロンバルディアの獲得無くして満足することがない—それは確かだ—僕は確信する—としても、それをフランスに引き渡すことは可能だろう。そしてもし君が、スイス人たちがいったんミラノ公国から、金を巻き上げることを覚えてしまった以上<sup>12</sup>、それが手に入らない状況を受け入れられるはずがないと主張するならば、フランス王がしかるべき貢納金を彼ら

に与えてやればよいと返答しよう。スイス人たちは、こうなってしまうとフランス王は、彼が約定したとしても、それ[この貢納の義務]を破ることができるほど強大な存在になるだろうとは考えてはいない。なぜならスイス人たちはいまやたいへん強気になっていて、如何なる人間もまたどんな諸侯も己が力で叩き潰すことができると、固く信じているほどだからだ。だから何度もその現実を見せつけられた[スイス軍の強大という]経験に照らして言えば、スイス人たちを無視して教皇様が他国と盟約を結ぶことを、僕なら決して勧めたりはしないだろう。

だがしかし親愛なる我が友よ、私たちはキリスト教徒たちばかりのことを気にして、トルコの君主のことを脇に置いてしまっていた<sup>13</sup>。だがこのトルコの君主こそはこれらのキリスト教君主たちが和議をもてあそんでいる間に、これまで誰も考え及ばなかったような、どれくらいことをやってのける存在なのではないだろうか。そのために彼には戦士であると共に卓越した指揮官たる必要がある訳だが、彼はその狙いを既に征服へと定め、幸運にも恵まれ、その思いのままになる十分に訓練された兵士を召し抱え、資金も十分にあり、また広大な領土をも支配しているから<sup>14</sup>、彼には[こうした大事業をなすに]如何なる障害もない。それに加えいまや彼は、タタール人とも和約を結んでいる。だから一年とたたないうちに彼が、イタリアの害にしかならないこれらの坊主どもを次第に駆除してしまうことになっても、僕は決して驚いたりはしないつもりだ。だがこのことについて今はこれ以上語るつもりはない。

て、「イングランド王はスペイン王の意のままになっているように見受けられます」と書き記している。  
<sup>12</sup> スイス人(スイス誓約者同盟)はミラノ公より貢納金を受領していた。

<sup>13</sup> 1512年に即位したトルコの皇帝セルム1世。

<sup>14</sup> トルクの軍事体制につきマキアヴェッリは、『君論』第19章に言及を行っている。

それにしても僕は君とこうしたことやその他のことについて、[フィレンツェに帰国して] 15 日以内に共に語り合うことができるようになることを願ってやまない。君はもちろん、帰任した僕もやることなくなる訳だから、こうしたことについて語り合わなければつまらないじゃないか。

フランチェスコ・ヴェットーリ ローマ駐劄大使

1513 年 6 月 27 日

第 13 書簡 フランチェスコ・ヴェットーリからニッコロ・マキアヴェッリへ

ローマ 1513 年 8 月 5 日

盛名赫々たる士ニッコロ・デ・マキアヴェッリ殿

我が親しき友よ、もし僕が自分の書いた手紙の写しを保存することを習わしとしているなら、君の手紙を受け取るや否や、僕は自分の書いた手紙の写しを慌てて探し始めることだろう<sup>16</sup>。そして書かなければならなかった大事なことを、書いていないことに驚いてしまうことだろう。そうだ、その時に僕は、自分の脳中でこれらの喧々譁々のふるまいを繰り広げるキリスト教世界の諸王侯たちの意図を分析し、フランス王について君と同じ結論に達したのだった。そこから僕は、フランス王が何度にもわたって、彼の望むままにイタリア全土を征服する機会があったのに、そうすることができなかった、その理由を考察し

たのだった。このような結論がどこから生じたのか、それが蒙った不運からか、私の熱意の欠如か、それとも私の能力の乏しさによるものであるかは別として、僕はそのことにつき[先の手紙に]君に書き落としをしまっていたように思う。その時に僕たちが合致した結論とは、フランス王の意図は、ロンバルディアを征服するということに留まるということだった。事実その時に君が示してくれた議論は、可能な限りにおいて筋道のたった賢明なものであった。君が語ってくれた結論は僕にも合点の行くものであったから、僕は教皇とフランス王とスペイン王の間で、さらにはヴェネツィア人とも、和平の合意が交わされ得るものと踏んでいた<sup>16</sup>。だがフランス王とイングランド王が和平を結ぶのは困難だろうと僕は見ている。若くて胆力がありまた裕福なイングランド王が、歩兵を雇ったり輸送船を調達するために多大な支出を行い、多数の軍勢を渡海させて大作戦を敢行したにもかかわらず<sup>17</sup>、教皇とスペイン王が説得したというだけで、若干の賠償金と引きかえ、多大なる恥辱を蒙って兵を引いたりするものとは、僕にはとても信じられないからだ。僕は次のように考えていた。もし彼がフランスから兵を引かなければ、スペイン王が彼に対して敵となるぞと彼に伝えることで、スペイン王がイングランド王に情勢を悟らしめた結果、後者もやむなく譲歩したのだと。だが僕は今では、スペイン王がこのような行動に出たとはとても信じられない。なぜならスペイン王とフランス王の間には深刻な対立関係があり、カ

<sup>16</sup> ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛 1513 年 7 月 12 日付書簡とそれに対するマキアヴェッリの返信[これ自体は未発見]を示唆している。

<sup>16</sup> 1513 年 6 月 20 日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡参照。ヴェットーリの見解とは異なり、この書簡においてマキアヴェッリは、ヴェローナ及びピチェンツァをめぐるヴェネツィア人と皇帝の間の

対立と、ミラノを目標としたスイス人とフランス王との間の対立を双方共に、癒しがたいものと見なしている。そこに我々は、(普遍的) 和平の可能性の排除を前提とした、マキアヴェッリのいわゆる(現実主義的) 観点を看取することができよう。

<sup>17</sup> 1513 年 6 月 1 日にイギリス王ヘンリー 8 世はその軍勢を、フランス領カレーに上陸させた。

トリック王がイングランド王と全面的に手を切ろうと望むなどありそうもないことだからだ。というのも彼はフランス王のことを少しも信じてはおらず、また教皇の権力や權威が彼をフランス王の圧迫から守ってくれるとも思っていないだろうからだ。それどころかスペイン王は自分が支配しているナポリ王国の征服を、実は教皇が狙っており、そのことが教皇をしてフランス王に便宜を図るよう動機づけてはいまいかと疑うようになってすらいる。このことをよく考えれば、この両三年くらいの間戦争を続ける用意のあるイングランド人たちに兵を引かせることのできる存在は、スイス人以外には考えられない。スイス人たちはフランス王がロンバルディアを捨てようとするたびごとに、フランスに味方する立場をとり続けてきたように僕には思われる。というのも、フランス王国全体を破壊することは、そこから多大な利益を引き出し、今なお引き出しつつある彼らにとって決して利となることではないからだ。そしてもし教皇とフランス王、スペイン王そしてスイス人たちの間で和平の合意がなされるなら、スペイン王にとりイングランド王への配慮は無用ということとなるだろう。というのもスイス人と親善を保ってさえいれば、フランス王からの脅威や、さらには教皇からの圧迫からすら己を守ることができる、彼には思われるだろうからだ。なぜならスイス人こそが和平条約を守らない者に対しての、彼らの間での調整役に他ならないからだ。ヴェネツィア人たちがこの和約に参加するだろうことは言うまでもない。なぜならもしブ

レッシアとベルガモを再領有できたなら、このことは彼らにとり望外の満足の種となろうからだ。皇帝に対してヴェネツィア人は誰にも助けを求めることができないから、彼らだけで対峙し続けなければならぬため、不満を飲み込むことが必要となるだろう。ミラノ公はピチェンツァやパルマを含む失ったすべての領土を回復するかも知れない。フェラーラ公も同様だ。スイス人のことを恐れる必要はあるまい。

[なぜならフェラーラ公と対立した場合] 彼らは、一方ではフランス人を、他方では全イタリアとさらに加えてこの地に駐屯するスペイン兵とを相手にしなければならぬからだ。反復常なきナポリ王国の人民に対処するため、カトリック王はこの地 [フェラーラ] に、一定数の軍を配さざるを得ないのだ。カーザが私に書いて寄こしたことは疑う余地がない<sup>18</sup>。それは即ちスイス人が残余のドイツ人と同盟するのではないかということ、君の取り越し苦労に過ぎないということだ<sup>19</sup>。というのもこの両者の間の [従来からの] 敵対関係や、あるいはまたスイス人がオーストリア家 (ハプスブルク家) に加えた攻撃のことを度外視するとしても、スイス人として馬鹿ではないから、皇帝のもつ威勢のほどはよく心得ているその故に、彼らが [ドイツ人に加勢して] 皇帝をいっそう強大にすることを受け入れるはずがない。スイス人が [イタリアに] 屯田するのではないかと心配する必要もあるまい。なぜなら君も知っての通り、そんなことができるほど彼らの数は多くはないからだ。彼らの目的は戦利品あさりや賠償金の獲得で、それさえできれば

<sup>18</sup> フィリッポ・カザヴェッキアのこと。

<sup>19</sup> 残余のドイツ人とはすなわち、ドイツ領内の「自由都市」のこと。事実その著『ドイツ事情』においてマキアヴェッリ自身、ドイツの自治都市とスイス人との合同が不可能であることにつき論じていることに、留意すべきであろう。「スイス人の脅威」とい

う「見解」は1513年に入ると、前年1512年にそのテキストにおいて示された、それに対する留保を緩和するようマキアヴェッリを促すに至っていた。これについては本書簡に対する返信たる、1513年8月10日付マキアヴェッリ発ヴェネトリー書簡に詳説されている。



故郷に舞い戻ってしまうに違いない。君は皇帝が代替わりする（すなわちハプスブルク家出身以外の者が帝位につく）かもしれないし、スイス人たちが他人の犠牲を通じて〔国際外交についての〕見識を深めるかもしれないと主張するかも知れない。私もそのことには同意しよう。だがこの世のことは転変恒なきものだから、私は未来永劫続く平和のことでなく、もっぱら目先の数年の平和のことだけを考えたと思う。なぜなら我々にはそれしかやりようがないからだ。僕が思うに君は、フランス人がミラノを断念することはないと思うだろう。その意見に対し僕はこう答えよう。即ちイングランド人たちはフランス王が安閑とミラノに留まることをさせないだろうし、スイス人もまたなおさらだ。スペインも水面下でそのように働きかけるであろうし、自身の利益のためフランス王を利用しようとする教皇も、それには対処の術があるまい。結論を言えば、もしくはともキリスト教的なる>国王（フランス王）がロンバルディアを断念することに合意するなら、イタリア全土の平和を目にすることができようし、その上でもシカトリック王がこの世を去れば、ナポリ王国はフェデリーゴ王の子のもとに返還されることだろう<sup>20</sup>。かくしてイタリアは戦争開始前の状態に戻ることができるに違いない。このようになる以外に、フランスとイタリアが害を蒙らないようにするどんな手段があるか僕にはわからない。僕は神様が僕たち哀れなキリスト教徒を懲罰するのではないか、そして我々の君主たちが互いにいがみ合い、互いを糾合する術を見出せぬその間に、トルコの新しい大君主が海陸において我々の背後から襲いかかり<sup>21</sup>、お高く留まった坊主どもやその他ののら

くら者どもを駆逐しはしないか心配でならない。本当はこうした坊主どもの駆除は、それが早々に生じれば生じるほど良いことなのだが。私がこうした坊主どものあくなき食欲に、どれほどうんざりしているか君には信じられない程だろう。教皇様については何も言うまい。このお方は坊主というお立場でいらっしやらなければ、単に世俗の一大君主というに過ぎないのだから。

このことについて私はすべての判断を君に委ね、君が私に手紙を書いてくれることを願うばかりだよ。君がしてくれる考察はどれも私の気に入るものばかりだからね。神様が御身を助けてくださいますように。

フランチェスコ・ヴェットーリ ローマ  
駐節大使

1513年8月5日

<sup>20</sup> 1501年に廃位された、最後のトラスタマラ系ナポリ王フェデリーコ1世のこと。

<sup>21</sup> 1512年5月に、先代バジャジッド2世の後を継ぎトルコのスルタンとなったセリム1世のこと。